

第2回富山県文化審議会 議事録

日時：令和8年3月24日（火）

15時～16時40分

場所：富山県民会館 401 会議室

■議事

- (1) 次期計画策定にあたってのアンケート結果について
- (2) 次期計画の骨子案について

【長澤会長】

それでは議事を進めさせていただきますので、会議の円滑な進行について、皆様のご協力をお願いいたします。

本日は前回に引き続き、新たな県民文化計画の策定についてご審議いただきます。

初めに、事務局が先般実施されました、次期計画策定にあたってのアンケート結果及び、次期計画の骨子案、そして前回話題に出ました、アーツカウンシルについて全国の事例などを整理してもらいましたので、ご説明いただきたいと思います。

忌憚のない、いろんな方からのご意見を伺いながら進めていきたいと思っております。

【事務局】

配布資料に沿って説明（約25分）

【長澤会長】

委員の皆さんからご意見をいただきたいと思います。まずは、アンケート結果の感想を含めてお考えをお聞かせください。

【佐部利委員】

文化芸術は広いので、祭りなら祭りでやるべきこと、芸術なら芸術でやるべきことというのがあるのではないかと。骨子案を踏まえて具体的に動けるイメージを持つのが大事。

今の説明の中で、大きくは、子どもたちの教育や、団体や地域のつながり、そして、訪日外国人や障害のある人などのインクルーシブの問題、町おこしの問題に分かれると思う。そうなったときに、質の高いものを見せるといっても、質が高いか低いかを誰が判断するのか。もしくは、県民が文化芸術に触れて感動したというのは、何で測るのか。非常に抽象的なことが多くなってくると思う。

そう思ったときに、具体的にはどうしたらいいのか。例えば、教育、こどものことで挙げるなら、アニメとか映画をやればいい。しかし、少し前にジブリの展覧会をやっていたが、人がたくさん来たかと言われれば、そういうわけでもない。ジブリは映画で見るから面白いという考えがある。しかし、美術館はデザインというものをキーワードにしていて、デザインはものすごく広い切り口がある。その切り口は大事にしながら、小学校から大学までの利用頻度を上

げていくということがあると、まずこどもが興味を持ち、お父さんお母さんに話をして文化が広がるのかと思う。

インクルーシブの面でいうと、例えば、皆さんが違いを認めていくという点で、障害のある人や外国人の違いということも非常に強いアピールポイントになる。そうなったときに、アートと福祉という視点があるとするならば、支援施設も文化施設になりうるのではないかという視点を持つこと。そういったときに、町中とか自然を生かしたりする中で、アーティスト・イン・レジデンス（一定期間ある土地に作家が留まって創作活動を行うこと）なんていうことはあるかと。

あとは、祭りとかは非常に若い人でやろうとしており、キーパーソンの人がいる。そういう方と繋がっていくということが必要なと思う。

あとは、やはり助成金も必要だと思うが、自分の団体でお金を作ることができればなど。助成金がなくなると活動ができないようなことではなくて、自分の団体で生み出すことができればなど。お祭りをもとに、何かできないか。今持っているもののパッケージを変えるだけでも違ってくると思う。

各地のアーツカウンシルを視察したことがあるが、良い面も悪い面もある。何がやりたいかを明確にした上で考えるべき。やりたいことが明確になっていて、具体的なイメージを持っていて、それができる組織がアーツカウンシルだと思う。

【内山委員】

アンケート結果を見ると、若年層の18歳から19歳の人たちのアンケート回答者が4人しかいない。このアンケートを信じていいのか不安になる。

私は子育て情報誌を作っていて、ママさんたちのお話をよく聞いたりするので、文化芸術に触れさせたいとか、こどもたちがこういうアート活動が好きだという、いろんなお母さんたちの意見を聞く。

この10年先を作っていくこどもたちの意見みたいなものが、このアンケートにどれだけ出ているのだろうと思うと、少し不安に思ってしまう。これを元に作るのが本当に正しいのかとってしまう。郵送でアンケートを実施するというのは今までのやり方だと思うが、こどももお母さんたちも今SNSとかで、簡単にアンケートも取れるようになっているので、ぜひ意見はきちんとしっかり取っていただけたらいいかなと思う。

アンケート結果を見ると、やはり高齢の方々の意見が多くなってしまっているので、その意見が大多数だろうとなって、それで計画策定を進めるというのはどうかと思う。高齢の方々は10年後20年後お金を落としてくださる方々かという視点も踏まえてやっていかないといけないのではないかなと思う。

【武内委員】

今いろいろ聞かせていただいた上で、根本は誰のために、何のために、なぜ、というところが、一番のポイントなのかなと思う。そういう意味から考えると、いわゆる文化芸術というものとの定義は非常に難しいと思っている。結果的に文化芸術になったということかもしれない。その人たちが、それに関わることで自分たちらしさを表現できるだとか、いわゆる自分の中の幸せの感覚が上がるのが、文化や芸術に繋がっている。それをするから豊かになるというよりは、やったことの結果がそういう風に評価されているという方が大きいのかなと思う。

ただその中で、例えば、その地域の祭りみたいなものになると、結果的に、それをどう繋いでいくかみたいところが非常に焦点にはなる。それに携わる地域の人が、継承していくことを本当に良しと思っているかどうかというのは、また少しずれがあるように思う。いろいろなライフスタイルの変化や価値観の変化によって、義務感や継承することがまずありきになりすぎて、実際に関わる人達の思いや考え方は、多少ずれていると思う。

なぜ、文化芸術が必要とされるのかということについては、もっと柔軟な見方をしていく必要があるのかなと。

先ほどのアーツカウンシルの話についても、魚を釣ってあげるのではなく、魚の釣り方を教えてあげるように、助成金を差し出すことが目的ではなくて、自分たちでそれを工面する手段を一緒になって考えるだとか、そういう企業と結びつけるだとか、そういうことの方が重要なのかなと思ったりはしている。

富山で活躍されているオペラ歌手の澤武紀行さんのお話だが、ご自身で射水市に劇場を作られて、ご自身で集客をしている。場さえ用意してもらえばお客さんが自然に集まると勘違いしている人が多い。澤武さん曰く、自分で手売りして、集客をした方がよいとのこと。どうしても芸術家は、そこに対する価値観のずれがあるように思うとおっしゃっていた。

アーツカウンシルというものが関わる理由の一つというのは、何かお膳立てをしてあげることでなくて、意識をどういう風に向けていってあげるかということも非常に重要なのかなと思う。

【長澤会長】

「文化芸術」と「芸術文化」は違う。そういう意味でいうと、この審議会で検討していくのは芸術、という風に僕らの固定感が少し変わってきている。何のためにこれをやらなきゃいけないのかという視点で。価値合理性と目的合理性を分けて考えて、あとからくっつける。それらを整理するのが非常に難しい時代にもなってきている。

文化は創造できないものだと僕は思っている。文化は基本的になくなったときに寂しくなったと思うような価値観。そういうときに、あれは文化だと気づく。人間が文化を作るのではなく、文化になるかもしれないものを作ろうとすることができる。それが文化になるかどうかだと思う。これは職場でも、芸術でも、食文化でも、起こりえること。

高校の美術部と美術大学は少し違う。美術大学ではもっとクリエイティブな教育をしている。だからこそ、(アーツカウンシルという)専門性の高い固まり、大きな傘があればいいのではないかと。大きく広げないとカバーできない。みんなが雨に濡れないように、大きな傘を作らないとウェルビーイング向上はなかなか難しいのではないかと。

内山委員の言うことはそのとおりだと思う。時代と共に支援の仕方も変わっていく。4人の意見で若者代表の意見と言わないでくれという話だと思う。

行政の立場からすると、数字を出して根拠を示さないといけない辛さがある。

対照的に、芸術家は質で生きている。3人しか自分の作品を見に来なかったけど、その人達が感動すれば満足する人もいる。逆に、1,000人来てても何だあれと言われて、だめな場合もある。こうなってくると解釈が難しい。これを考えて、次の文化政策をどうしたらいいんだろうということ。

行政は縦割りで予算がついて所管になっているが、芸術系において世界中で注目されているのが、横串を刺すクリエイティブなやり方。

今までみたいに一つの形式化されたものを作ったらこうなりますよみたいなことが、もう成り立たない。だから難しい。そういうところに差しかかっている。

僕が注目したのは、伊東委員に関係するかもしれないが、職能団体に若い世代の会員が入ってこない。団体を作った時は元気な人達だが、その人達も高齢になってきている。勢いを失って、消滅方向にある。そうすると、若者はもっと魅力を感じなくなる。そういったことが指摘されている。皆さんはどう思うか。

【佐部利委員】

アートや美術が好きな若い人が存分に活躍できるような場がない。若い人が熱量を持ってやっているのが面白いなというふうに伝わって行って、私も参加したいというのが本来の流れとすると、みんなに平等にというのはなかなか難しい話。質がいいかどうかもわからないという状況になったときに、その熱を大事にしなが、出てきたものを面白いと感じる感性を持つことが必要なのかな。

例えば、祭りをテーマにいろんな作家が表現する。その作家がいろんな学校にワークショップに行くというように、繋がっていくこと、それを企業がタイアップするみたいな形で繋がっていくと良い。全部一緒にやるのは難しいと思う。今年は若手のアートを中心に、この年は地域芸能を中心に、というように絞りながらやっていかないと、結局何をやっていくかわからなくなる。

高校生でも中学生でも、アートが好きな人がいろんな場所で表現できるような場というものを考えたとき、ないのかなと思うが、県美や水美などいろんな美術館がある。そういった今ある施設とうまく連携ができればいいと思う。団体ができることの役割として、若手の場所を作る、企業に献金を募るとか、お金を出してもらったらお返しできると良いので、完成した作品を寄贈するとか。そういったことができる具体的なイメージが持てるかなと。

内部だけで終結するというのは面白くない。外国人や障害のある人を含めていろんな人が入ってくる、というようなことができる面白のかなと。今の芸術祭もそうだが、単発ではやっているから、あとはもっと団体同士の繋がりが出てくると良い。

【長澤会長】

高文連というものがあって、地域を超えて中央に行ったりしているが、どのように運営しているのか。

【西島委員】

毎年富山県においては、10、11月頃に、富山県高文祭を行っており、推薦される専門部もあれば、競うことで代表を決めて、次年度の全国大会に出場することもある。

一部は県からの補助、生徒や高文連の会費等で実施している。やはり全国でも協賛が集まらないという話はある。それぞれが最低限のラインで行っている。収入を得ることも、参加費を募ることもない。

祭りという点に関して、郷土芸能部では、八尾高校は「おわら」、南砺平高校は「むぎや」を行っている。どちらも部員31名。

あまり知られていないが、県高文祭のステージ発表では、その2校が、高校野球部が甲子園に行くのと同じくらい熱い戦いを繰り広げている。生徒たちが力を入れて、地域の方の力を借りて取り組んでいる。大会当日の発表だけではなく、そういった経緯を知っていただくことで、県民の方により興味を示していただきたいなど。

【長澤会長】

今いろいろな意見が出ている中で、青柳委員は海外でも活動されているがどうか。

【青柳委員】

富山県芸術文化協会が友好提携している、ハンガリーのデブレツェン市で日本文化の書の展示会を行い、1,000人ぐらいの人が集まってくれた。現地の方の芸術に対する認識は素晴らしかった。

その一角にある公園に、「富山の森」というものがあって、富山は海外でこんなに活躍しているということを初めて認識させていただいた。そこで、十二単を着て書道パフォーマンスを行った。その時ご一緒させていただいたお琴の黒川真理さんらに演奏してもらってコラボした。ものすごく評判が良く、夜遅くまで盛り上がり、こんなに日本文化に造詣の深い方々がいらっしゃるのかと感動した。そういうことを富山でもできればと思っている。私がやっていることで何か力になれることがあればと思っている。

【長澤会長】

富山は世界でも頑張っているという話をしていただいたが、観光の推進という面ではどうか。

【砂原委員】

観光の面でいうと、コロナ前は台湾や韓国等のアジアからのお客様が主だったが、最近は欧米・豪州等からの旅行者が増加している。欧米市場での県のプロモーションや、NYタイムズに「行くべき所」として取り上げられたことなどが背景にあると思われる。

旅行者の訪問先も、アルペンルート等の自然景観を楽しむだけでなく、「おわら風の盆」等のお祭りや高岡銅器等の工芸品など伝統文化を体験したり、「富山湾鮎」等の食の魅力を味わったりするなど、多様化している。

アンケートについて、若い人のご意見をもう少し取り入れてもよいのかなど。アンケートの対象は18歳からとなっているが、将来を担う中学生や高校生の若い方がどう考えていらっしゃるかというのも、もう少し取り入れていただいたらいいのではないかと思う。

なかなか学校の先生方は忙しくて、紙でのアンケート回収等は難しいので、LINEとかを使ってやれればと。先日も環水公園でイベントが行われていたが、そういう若い人が来る場でLINEを使って実施したり、これから幼稚園や小学校で行われるPTAの総会等で、若いお父さんお母さんのご意見をLINEとかで簡単に聞ければなど。

若い人が文化イベントを見に来れば、また若い人たちが参加しようと思うので、そういったところで学校教育のご協力も大事なのではないかなと感じた。

■事務局より参考資料3について追加説明（約5分）

これから新しい文化計画を作るにあたって、若い世代の意見を取り入れたいということで、県に提言したいという思いを持って自主的に集まってくれた県内の高校の生徒さん達に、富山県の文化芸術をどうしていけば、子どもたちがもっと文化を身近に感じるか考えてください、というテーマを出させていただいた。その答えが、参考資料3にまとめられており、その高校生達に発表してもらった。

文化芸術振興の意義として、自分たちにとって楽しさ、感動、心の安らぎを与えてくれるもの、人生を豊かにするものである。さらに、創造力や感性を育て、他人を大切にしながら一緒に生きる力を養い、ウェルビーイング向上に繋がるものだと言ってくれていた。

また、生徒さん達がアンケートを自分たちで行ってくれて、県下の8校、計576人が回答してくれたものの結果もまとめられている。アンケート結果の中で、例えば、印象に残っている富山県の伝統工芸品についての質問で、富山ガラスや高岡銅器、菅笠などが多く挙げられている。このように、500人を超える高校生が答えてくれているので、それについては参考にできるかなど。

アンケートの他にも、富山の伝統工芸である菅笠を若い子にも広めるために、ぬいぐるみ用の菅笠を作るというアイデアを出してもらった。こういったものは今活躍している職人にはなかなか思いつかないアイデアだと思う。発表の際に新田知事も出席していたが、こういった若い子のアイデアを職人さんに伝えていきたいと発言していた。

富山の若い子達も富山の伝統工芸をはじめとした文化芸術のことを大事に思っているし、これからどうしたらもっと発展していくかということを考えてもらったので、追加で説明させていただいた。

【長澤会長】

高校生も良い提案をしている。自分達にできることの提案をしているのが面白い。社会に出てくる手前の段階で、こういう風に考えてくれているというのが大事。

いわゆる芸術という風に富山県民が理解しているものと、今、世界でこれも芸術になるかもみたいなものもどんどん生まれている。そういう意味においては、このアンケートでも、文化芸術という言葉自体の定義が、アンケートに答える人自体も、何がわかってないかわからないぐらい広がりを持っている。全部芸術ではないかみたいな。そういう意味では、ある種の芸術というくくりをどうとらえて、この先5年、10年富山県が支援していくか。今回の答申をまとめていくにあたっての重要なポイントになると思う。

広がりや認めたとしても、その芸術というものの自体を、県民はちゃんと理解をしているかどうかというところが、わかっているのかわからない。

文化振興をされている清原委員はどう考えるか。

【清原委員】

財団では文化施設の管理を主に実施しており、文化ホールにおいてコンサートを開催するほか、財団独自の事業として学校コンサート等を、県の支援を受けながら行っている。

これまでは、舞台芸術、美術展を事業の中心としているが、障害者芸術等のいわゆるインクルーシブ事業についても、今年度から、力を入れていくこととしており、米田委員とも協力して、できる範囲から少しずつ取り組もうと思っている。

前回の審議会でも、長澤会長から価値合理性と目的合理性の観点から検討が必要と発言があった。

芸術家個人なり、団体の観点で考えると、価値合理性は作り手の問題意識や価値観の表現とかではないかと思う。目的合理性は、そういった表現についての集客、資金調達ではないかと私は考えた。

文化行政に置き換えると、価値合理性は、県民文化計画の骨子案にあるとおり「誰もが文化に親しみ、関わることにより、心の豊かさを実感している」ことと考える。目的合理性は、そのためにいろんな質の高い公演や展示をより多くの人に見てもらい、参加してもらおうということだったと考える。

近年は、インクルーシブやまちづくり、地域活性化に文化を活用するという例が増えている。これまでは、文化振興自体が目的だったが、社会の活性化や役立てるために文化を利用することが増えているのかなと受け止めている。

アーツカウンシルネットワークに財団もオブザーブ参加させていただいた。他県のアーツカウンシルでは、従来の文化振興に加えて、そういった社会に貢献するような文化振興の取り組みを取り入れていくという動きもあるため、今後、アーツカウンシルについて検討されるのであれば、そういったものを取り入れてもいいのではないかと思った。

【長澤会長】

アンケートの10ページ「今後どうなれば美術館や博物館等にもっと行きたいと思うか」という質問に対して、一番多い回答が「全国的あるいは世界的に著名な芸術家の展覧会の開催」となっているが、ものすごいお金がかかる。世界に一つしかないものを巡回展するにしても、何年か待たないと来ない。それくらい希少価値が高い。そう考えると、回答者たちの希望はそうであろうが、簡単にできるものではない。何をもって世界的に著名というのか、というのも難しい。けれども、富山県の人々はそういう機会を求めている。

瀬戸内では、島がまるごと美術館であったりと、いろんなことをやっている。富山県文化振興財団はいわゆる箱。建物の運営をされている。地域をいろいろ出歩いて見ていると、何が芸術かというよりは、見せるものがないといけないと思う。

もっと言うと、必ずしも美術館とかギャラリーで作品を見せなくても、結構いろんなところで何かやっている。カフェの横でコンサートをやったりとか。そういう意味では今までの定義そのものが大分変わってきていて、発表の機会の場所もなかなか難しい。

地域を元気にしようとか、そういう意味で文化を使おうという目的合理性は、全国各地にあると思う。

それも含めて時代が変わろうとしている最中であるので、まとめるのは非常に意義があるけれども難しい。

芸文協は県内で一番大きい芸術系団体の塊。演劇系に特に力が入っている気がするが、他にも華道などもあり、美術もある。伊東委員はそういった団体の会長をされているが、その辺について思うことがあれば、ぜひ意見を伺いたい。

【伊東委員】

先ほどハンガリーの話が出たので補足すると、ハンガリーのデブレツェン市の文化団体との交流は45年の歴史を持っており、提携を結んで26年ということで、継続的に交流している。

「富山の森」も、向こうのハンガリー側が作ったもの。そこで様々な行事をしていただける。今年は45年を記念した記録集を、ハンガリーの交流団体で作りたいという話をされている。デブレツェン市では富山はすごく有名。

向こうからは、県レベル市レベルの提携を言われたが、行政提携にすると、政治や経済はお金が付き物だから、文化にしたいという思いがあった。もちろん県から支援をいただいているが、国際交流の渡航費等の多くは、自費でやっている。この間のリンゲンもこどもたちの親が出しているし、先ほどお話された青柳委員や黒川先生も自費である。とりわけ、劇団文芸座による演劇交流は100%自費である。先ほど話題になったように、自分たちがお金を工面して取り組んでいって、そこにかかるいわゆる共通経費としてのお金を、ある程度県から補助いただいて、芸文協が関わるということ。

芸文協は他県と同じように考えると、職能団体の一つかもしれないが、芸文協が設立された昭和47年、これまで富山県芸術祭実行委員会として職能団体が補助金を分配しているということが、マンネリ化してるとのではないかという批判があった。それをもとに、富山県教育委員会が働きかけて、民間の方々が、自分たちが中心になって、分野を越えて幅を広げて交流をしようと富山県芸術文化協会が設立された。そこに県から支援をいただいている。各分野を越え

て、繋がりを持って交流して、文化事業を新たに行っていくことについて、支援したり活動を推進したりしている団体である。それが原動力になっているということだと思う。それがこれからどう継続するかという点では、もちろん職能団体のラインもあるが、そういった分野を越えた繋がりはとても大事であると思っている。

せっかくの機会だから、資料2「次期計画の骨子案」について意見を言うべきだと思うので、その辺りについてお話をさせていただく。

前回に意見を申し上げたが、やはり今の「芸術」と「文化」、「文化芸術」について、文化庁でもいろいろ議論があるが、私たちは富山で作る文化計画であるため、そこに何ととっても、ふるさと富山の文化の視点はとても大事。

先ほど職能団体のお話があったが、中央で決めた縦割りとなると、どうしても中央からのやり方による文化になる。中央からの文化の仕組みもあるが、富山ならではのいろんな分野間の交流をして、新たな創造創作をしようという考え方でいるので、ふるさと富山の文化を入れていただいて良かったと思う。

もう一つは活動の視点を加えていただいた。単に中央や世界的な素晴らしいものを見る、触れるというだけではない。こどもについても、素晴らしいものを見ることは重要だが、自分のアートは自分ならではのアートであって、キリンを見たらこんな風に見えるというところからスタートして作品ができ上がっていくので、鑑賞だけでなく、体験や活動の視点が加わったのは良かったと。

言葉遣いだが、カタカナはできるだけわかりやすくしていただきたい。インクルーシブやアーツカウンシルとか。ユニークベニューまでくるとわかりづらい。

先ほどお話されてきたことについては、もうすでに富山では様々なことをやっていて、例えば先ほど佐部利委員がおっしゃった繋がるという点や、アーティスト・イン・レジデンスについて言うならば、井波では1991年に、ハンガリーのアートキャンプに芸文協から派遣した、井波の木彫刻の方々が、ぜひ富山でもやりたいと言って、井波彫刻協同組合と井波美術協会と井波町（現南砺市）が加わって、4年ごとに木彫刻キャンプをやっている。

それ以外にもアートキャンプなど様々な地域で、いろんな町の中で作品を作ったりしているので、すでに富山にもある。その核になっているのは、富山県芸術文化協会の会員の方々。彼らがそれぞれ繋がり求めて、その分野の団体で活動するだけじゃなくて、団体を超えて交流し、活動している。

アーツカウンシルについても、各県の芸文協と関わっているので、何年か前からいろいろ聞いて、それに関わっていらっしゃる県外の専門の方々からも勧められている。職能団体がお金を配っていることへの批判から始まった芸文協からすると、単なる評議員が中央から来て、お金の配分を決めることになる懸念を持つ。著名な芸術家やプロデューサー等により、作品展を島でやって脚光を浴びたというお話が先ほどあったが、中央や海外など、外から持ってきた文化になってしまう。文化評議会がどういう人選をして、どういう運営をするか。一見かっこよく見えても、せっかく富山に良いものがたくさんあるのだから、それをどう発見するかということに目を向けることが、とても重要なことだと思う。

こどもについては、こどもは可能性を持っており、伸ばすべきだと思うので、こどもの伸びる機会の支援というものに、目を向けていただきたいと思う。そういう意味で、アフタースク

ールが重要なので、学校の生徒たちを地域へ開放してほしい。地域でのこどもたちの活動を学校は認めてほしい。

最後に観光について、観光のために文化があるのではない。観光のみに限定するのではなく、幅広い意味合いを持たせていただきたい。もう少し広めて考えていただきたい。

身近に素晴らしい文化があるので、それを外からの目で気づかせていただければと。県民が自信を持つ機会というか、良いものを担っているということで、今後ともそれを担うやりがいを感じさせる機会を作り出すのが観光であろうと思う。むしろ観光が何ができるかという観点で、文化との結びつきを考えるべきではないかと思う。

地域活性化であれば、市町村単位の事業に特化して支援するのではなくて、広がりを持って、広い範囲での交流や活動に目を向けて支援し、推進していただきたいと思う。

【長澤会長】

佐部利委員がさっきおっしゃっていた話と繋がってくるものがあると思うが、何か意見はあるか。

【佐部利委員】

アーティスト・イン・レジデンスがあって、ハンガリーのアーティストを招へいしてやっていると思うので、その人達が児童ワークショップをすとかもあると思う。田舎でアーティスト・イン・レジデンスがあり、そこで関わったこどもたちが三兄弟全員留学をした。これはカルチャーショックで、伊東委員がおっしゃるように、外の人のおかげで、自分の価値を再確認できるということ。

今のお話を聞いていると、まずはこの5年間、若い世代とか、こどもたちとか、障害のある人たちに向けて、重点的にやってもいいのかなと。

若い世代のこどもたちのことを考えたときに、活躍する場所とか、アートに触れる場所について、与えられるのではなくて、いろんなものがあって、好きな所に行って好きなことができたりとか、好きな作家と関わるような機会があったりという状況で、まずこの5年間はこどもたち、若い人たち、障害のある人、外国人を中心に重点的な意味合いを出してもいいのかなと思う。

【長澤会長】

今回話を聞いて、富山は結構先駆けているいろんなことやっている感じがすごくある。そういうことを県民が知らないというのは、むしろまずいのではないかと思った。情報を共有できるような大きな傘が必要。メディアはメディアで自社の範囲をカバーする側面があるから、全部は網羅できない。県という大きなエリアで、情報をシェアできるような大きな傘「富山県傘」を作れることをアーツカウンシルという風に言っているが、そういったことが必要と感じた。

助成金がほしいということではなくて、あのサイトをバーッと見るとどこでどんなことをしているのかわかるような、観光サイトではなく、文化サイト。そういうものが運営できるようなものを県に設置してほしいなという気持ちがしてきている。

今回の皆さんのご意見を踏まえて、修正したアイデアを次回の審議会で提示して、また皆さ

んにお諮りしていくこととします。

それでは、これで終わりにさせていただきたいと思います。

【佐藤副知事】

私事にはなるが、3月末に副知事を退任することになった。そのため、この審議会の出席は今日が最後になってしまうような立場で申し上げるのも恐縮だが、新田知事もいるし、後任にも引き継ぐ予定。

今日の議論を聞いていて触発されたことがある。我々は「文化芸術」と随所に使っている。言葉として、表現として、ものすごく意識して使っている。英語にすると、「文化芸術」はカルチャーアンドアート。アンドが入る。カルチャーアートとかアートカルチャーとは言わない。やはり、カルチャーアンドアート。これから骨子案をもう一度夏に出す予定だが、より詳しい施策を落とし込むときには、具体的な施策について、カルチャーとアートは意識的に分けながら記載をしていかないといけないのではないかと感じた。特にこういった行政の計画では、そこを意識したい。

そういう意味では、新たな富山県民文化計画を作っていただきたいという諮問をさせていただいているが、その新たな県民文化計画というのは一般名詞である。現行の文化計画は固有名詞があって、「新世紀とやま文化振興計画」という名前。今回、新たな計画ができる時も、固有名詞はできることになるので、その固有名詞も大事なのかなと思う。委員の先生方には、その辺りのアイデアもいただけたら嬉しい。引き続き、貴重なご意見をいただければと。

本日は誠にありがとうございました。